

# 初級漢字クラスにおける漢字形の導入 —手の意味を持つ字形パーツを手がかりとして—

柳田 しのぶ

## 要 旨

初級漢字クラスは非漢字圏の学習者が多く、学習漢字が増えるにしたがってドロップアウトしていく学習者も少なくない。その理由として漢字形の複雑さや、読み方の多様さがあげられるが、どちらも漢字学習において必要不可欠な項目である。筆者が初級漢字クラスで実施した手の意味を持つ字形パーツを手がかりにした漢字導入法は、漢字形の再生に有効である可能性がある。実施したクラス背景とともにその導入方法について言及する。

【キーワード】 初級漢字クラス 再生のヒント 字形パーツ

## A Teaching Method in a Beginner Kanji Class: Using Some Hand Shapes as a Cue

YANAGITA Shinobu

**【Abstract】** Many students in the beginner kanji class are of a non-kanji background. Also, Several students drop out as the number of learned kanji increases. The reason is the complexity of character shapes and the variety of pronunciation. However, both are important elements to learn and use kanji. The kanji introduction method using the character hand shapes which I carried out in the beginner kanji class is possibly effective for cognitive regeneration, especially for kanji writing. I explain how to introduce it, along with the class background where the method was used.

**【Keywords】** beginner kanji class, a hint to writing, kanji parts

## 1. はじめに

日本語を学習する中で文字は避けて通れない学習項目である。日本語未習の学習者にとって、ひらがな・カタカナに加え漢字を学ばなければならないことは、心理的にもかなりの負担であろうことは容易に想像できる。筆者の担当した漢字クラスでは漢字形と意味そして読み方、使用法を教えているが、漢字は覚える容量が多く学習、習得がなかなか進まない学習者をしばしば見てきた。

一般的に再生は再認より難しいとされる。具体的に漢字学習の過程でいえば、漢字を書くことは漢字を読むことよりも難易度が高いということになるだろう。大北(2016)が、空書は字形認知の内在課の指標になると考えられると述べているように、漢字を書く際に使用する情報は学習者自身の記憶を頼りにしている。文脈を使用できない場面ではさらに難しくなる。加納(2015)は can-do statements を使用した漢字力意識調査で漢字の書き、漢字の構成要素において「できる」意識が低いと指摘している。

筆者の担当する初級漢字クラスでは、導入時に漢字形に重きを置いた授業を実施してきた。コース中には2回のテストを行っている。その際、読みのテストより書きのテストの得点の方が低いというのが、担当した初期の漢字クラスの傾向であった。しかし継続して漢字形に重きを置いた授業を続けるなかで、学期テストの読みと書きの得点が逆転する学習者が出てきた。彼らは、成績上位の学習者ではなく、平均成績の学習者であった。漢字形に重きを置いた導入法、また授業活動は、漢字の再生に有用なのではないかと思ったのが本報告の発端である。

そこで本稿では、短期留学生を対象とした総合漢字の初級クラスである漢字1、漢字2、漢字3で実践した漢字形の導入法を紹介する。

## 2. 初級漢字クラスの概要話

ここでは初級漢字クラスの概要を紹介する。先述の通り、総合漢字1、2、3は短期留学生を対象とする全15回にわたるコースである。初級漢字クラスでは『Basic Kanji Book』vol.1 および vol.2 をテキストとして使用し、さらにそれに準ずるタスクやクイズを学期中に行った。総合漢字1の学習漢字は第1課から第11課までの120字、総合漢字2の学習漢字は第11課から第22課までの142字、総合漢字3の学習漢字は第23課から第35課までの148字であった。第11課が総合漢字1と総合漢字2で重複しているのは、第11課が部首導入の課であったためである。それぞれのコースでは、毎回学習した漢字の宿題と確認のためのクイズがあり、コース中には中間テスト、期末テストの2回のテストを実施した。クイズやテストでは、単漢字の読み書きだけでなく、漢字語彙の読み書きの確認も行った。

### 3. 初級漢字クラスでの字形を重視した漢字導入法

初級漢字クラスで実施した漢字の導入方法は、漢字を絵画的に捉える方法である。教科書では静的に捉えるイラストをホワイトボードに描くことによって学習者は動的に捉えることができる。例えば「山」の場合ホワイトボードに山の絵を描きその上に漢字形を書く方法である。この方法は過去から導入時に取り入れられている方法であるが、新奇な字形として漢字を捉えている学習者、特に非漢字圏の学習者にとって親しみのある形として捉えられるイラストを介しての導入は有効であるといえる。特に分解できない単漢字には、有効な手段である。部首を持つ分解可能な漢字についても 3. 1 のような方法で絵画的に導入可能である。

#### 3. 1 分解可能な漢字の導入

部首を持つ漢字のように分解可能な漢字については漢字を部分に分け、それぞれの部分の意味を紹介し、最後に全ての部分を統合させて関連付けを行う方法をとった（図 1 参照）。

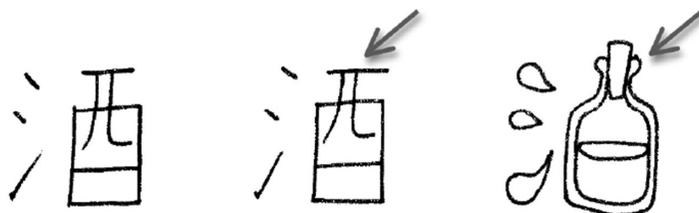


図 1 分解可能な漢字の板書例

Basic Kanji Book vol.1 第 11 課の「酒」の字形を導入する場合、最初に漢字を板書し、図 1 中央矢印の部分に注目させる。「酒はアルコールのため蒸発しないように栓が必要だ」と説明しながら図 1 右のイラストを漢字の隣に描くと、瓶の中の液体、栓、左の部首「さんずい」と関連付けられ alcohol の意味が確認できる。同じ手順で同じ課の「油」の漢字も導入可能である。その際の説明は「油は蒸発しないが、悪くならないように時々棒でかき回さなければならない」である。ここでの目的は、漢字形と意味の関連付けである。イラストは単純な方が学習者もノートに描き写しやすいので図 1 程度のイラストで十分であると考えられる。字形と意味の関連付けは、関連付けられる字形パーツを多く習得していない初級の学習者には授業内で行うのが一番有効な方法だろう。

### 3.2 手の意味を持つ字形パーツを意識した導入

筆者が意識的に導入した方法の一つに手の意味を持つ字形パーツを見つけるというタスクがある。手の旧字体である図2の字形パーツを学習者に提示し、学習者に探させ、それ漢字にどんな意味を持たせているかを考えさせるタスクである。漢字圏の学習者も「てへん」は知っていても、図2のような形は知らない学習者が多かったので、漢字圏・非漢字圏混合クラスでも特にタスクの難易度の観点からみて問題はなかった。Basic Kanji Book vol.1では第9課の「帰」「書」「教」が図2であげた手の字形パーツの導入課であった。



図2 手に関係する字形パーツ例

図2の左の2字がそれぞれ手の旧字体であり、円の中が手の字形パーツのバリエーションである。それぞれをよく見ると円で囲っていない左の旧字体が変化してできた形であることは容易に推測できる。これらの字形パーツを該当する漢字形導入の際に紹介したところ、非漢字圏、漢字圏学習者を問わず反応が大変よく、コースが進むにつれて学習者自身が漢字形から手の字形パーツを見つけるようになった。初級漢字学習者にとって、再認、再生のヒントとなる図2で提示したような字形パーツは、武部(1993)の『漢字はむずかしくない』で漢字の法則の中でも紹介されているが、授業での活動だけでなく学習者が自律的に学習する際にも有効であるという示唆にはならないだろうか。

実際に、表1のような手の字形パーツを提示してそれぞれの漢字を導入した。

表1 手の字形パーツを使用した漢字の導入例

漢字	手の字形パーツ	導入時の説明
帰	ヨ	手でほうきを持って、掃除している。 その場所へ道を通して帰る。
書	子	書道をするとき、筆を手に垂直に持ち書く。
教	又	先生は、手にむちを持って学生に教える。

表1は、先述の三つの漢字の導入方法である。「帰る」「書く」「教える」の漢字と意味の中に手が関係していることを字形パーツごとの関連付けの過程で確認していった。

実際、上記の例のように手の字形パーツを提示して漢字形を導入した初級漢字クラスにおける漢字テストでは、成績上位者には漢字テストの読み書きの得点に差はなかったものの、平均成績、また成績下位の学習者において読みより書きのテストの得点が高い学習者がみられた。漢字テストの読みと書きは、別紙で配布しており、読みのテストを実施回収した後、書きのテストを配布した。漢字を書くときにヒントとなるものはテスト上にはなかったため、授業内での上記のような漢字形導入方法の効果が得られた可能性がある。

### 3.3 字形と読み方の関連付けについて

漢字形と漢字の読み方また漢字語彙については、学習者に語彙の予習の宿題を出すことでフォローしていたが、実際語彙の予習をしてきた学習者はクラスの半数程度であった。したがって授業内で漢字形、漢字の読み、語彙を一度に学習している学習者がおり、彼らにとってはやはり漢字の学習は容易なものではなかったであろう。よって漢字の読みを覚えることに関してはクラス活動の中にもまだ改善の余地がある。

## 4. おわりに

本稿では、初級漢字クラスでの漢字形に重きをおいた導入法を紹介した。漢字の「へん」や「つくり」という説明ではなく、それらより分解した手の意味を持つ字形パーツを使用した漢字形の導入方法は、学習者におおむね好評であり、漢字クラス内で学生から自発的に手の字形パーツを指摘したり質問したりする場面もみられた。また学期テストの結果では、字形導入の効果と思われる読み書きの得点の逆転もみられた。漢字を学習する上で難しい、困難だと学習者に思わせている漢字形の導入法として、一つの可能性を見出したように感じる。

また加納(2014,2015)の can-do 項目に「手で書けなくてもワープロを使えば書ける」があるように、最近パソコンやスマートフォンの普及で漢字学習に対する認識も変わってきたように思う。「書く」という意識がこれからの漢字教育にどのように変わっていくのか、興味は尽きない。しかし手で書く場合でもコンピュータを使用する場合でも漢字形を認識しなければならないのは同様であるため、漢字学習初期の段階での字形認識のためのこれらの導入法はいずれにせよ有効であると筆者は考える。

今回の報告は、調査ではなく実践に基づいている。効果を実証するためには調査が必要である。手の意味を持つ字形パーツ以外にも有効な字形パーツもあるかもしれない。また、本稿は漢字形にのみ触れており、漢字の読み、語彙の運用等については言及して

いない。より有効な漢字導入法を考案するためにも読み書きの連動についても考えていきたい。これらを今後の課題とする。

## 参考文献

- 高木裕子 (2016) 「非漢字圏日本語学習者の漢字性後判断時の眼球運動と空書行動」 日本認知心理学会第14回大会口頭発表
- 加納千恵子・魏娜 (2015) 「学習者による漢字力の自己評価について -Can-do statements による漢字力意識調査から -」 『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 30号 : 35-53
- 加納千恵子 (2014) 「漢字に関する Can-do statement 調査からみえてくるもの - 漢字の知識と運用力についての学習者意識 -」 『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 29号 : 71-85
- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子 (2009) 『Basic kanji Book』 vol.1、凡人社
- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子 (2009) 『Basic kanji Book』 vol.2、凡人社
- 高木裕子 (1995) 「非漢字系日本語学習者における漢字パターン認識能力と漢字習得に関する研究」 『世界の日本語教育』 5号 : 125-138
- 武部良明 (1993) 『漢字は難しくない 24の法則ですべての漢字がマスターできる』 アルク